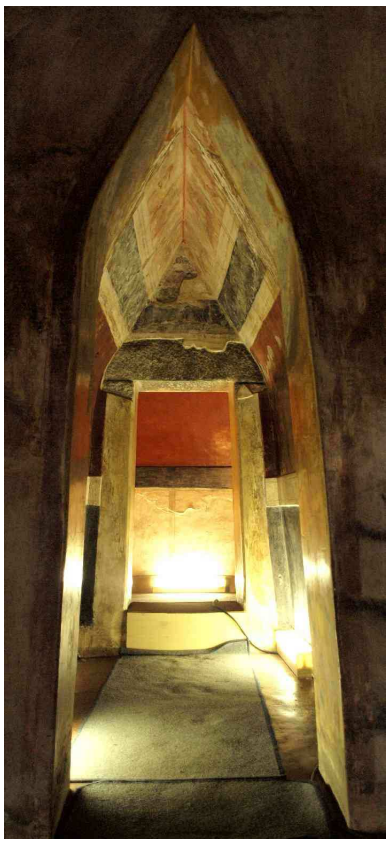


玄室への通路。これもオリジナルを複製している。

天井ドームの壁画。

通路がある。カウンターにはオバサンが二人いて、此処で入場券2Lv(110円)を買った。イラッシャイマセと云いながら券を渡してくれる。

狭い通路を抜けて玄室に入った。オリジナルが発見されたとき、既に副葬品はほとんどが失われていたことに加え、狭い玄室なので床には何も置かれていなかった。

見上げる天井ドームの壁画が素晴らしい。本物を見ていないので比較評価もできないものの、かなり丁寧に複製作業を行ったものと思う。取り敢えずカメラを床に置き、自分自身が映り込まないように、リモコンでシャッターを切る。モニターで撮影結果を見て微調整しながら合計6枚撮影。

墓場らしく静謐に包まれた場の雰囲気は良かったが、所詮は死者が安らぐところで、生きている人間が寛ぐところではない。10分足らずで玄室から出た。

先ほどのオバサンが、日本語で話しかけてくる。単語が出て来るだけだが、それにしても珍しいと思い、どこで学んだか訊いてみた。「此処だ。」という。種明かししてくれたところによると、墳墓を訪れる日本人団体は多く、その場合は通常ブルガリア人ガイドも同行しているので、この連中に教わったのだそうだ。

トラキア人墳墓博物館を後にして、宿へ戻った。まとめて置いた荷物を持ってフロントへ。料金は部屋代にプラスアルファがあり、二泊で141.5Lv(7,771円)だった。表へ出て時計を見ると10時ちょっと廻っていて、バスは11時発だから充分の余裕だ。

## １０．プロヴディフ(Пловдив)

### マイクロバス

バスステーションに着き、先ほど観光案内所で教えられた2番乗り場へ行く。まだ早過ぎるから他に待っている人はいない。

次第に待つ人が増え定刻5分前にマイクロバスが10メートルほど向こうに停車した。周りにいた人々が素早く動き出し乗り込んでゆく。待っていた順番はどうでも良いの

マイクロバスの車内。

カザンラクを出発して間もなくの車窓風景。彼方に雪を戴くのはシプカ峠付近。

がブルガリアの流儀だろうか。ともかくこんな時、よそ者が後れを取るのはやむを得ない。

運転手がトランクを開ける様子もないので、こちらから云い出しそびれて、キャリーカートにカバンを着けたまま乗り込む。プロヴディフまで100キロの切符が8Lv(439円)、だった。既に8割ほどの席は埋まっていたものの、後部の一人掛け座席に坐ることができる。

ガブロヴォから利用したバスと異なり、車体が小さいばかりか、小さな部落に立ち寄りながら行く路線バスだった。下車する乗客はほとんどなく、途中からの乗客で満席、ついには立つ人まででた。そうなると持ち込んだ荷物がはた迷惑で、肩身の狭い思いをしながら満員状態が早く解消することを願う。

立つ人がいなくなったのは、プロヴディフ間近になってからだったが、それでもほっとする。次第に沿道に建物が増え、人口35万でブルガリア二番目の大都市へ接近しつつあることを感じさせる。1時ちょっと前にプロヴディフ駅前のバスステーションに到着した。

此処から宿までは、2、3キロのはずだから、歩いて行けない距離ではない。しかし太陽の位置から南北は辛うじて判ったものの、英ガイドの地図を頼りに辿り着ける自信は全くなかった。付近で宿の住所をメモホルダーに書き込んで置いたものを客待ちをしているタクシー運転手に見せ、料金を尋ねた。5Lv(275円)だと云う。これまでの経験から、1キロ1Lv(55円)以下を目安としているから、この料金だと倍ふっかけられたことになる。

金額自体は取るに足りないが、甘く見られているのが気にくわない。おまけに咥えタバコで新聞を読んでいる様子が薄汚く感じられ、全体として不愉快だった。英ガイドには大都市の、駅周辺などで客待ちしているタクシーに雲助が多いと書かれている。

それではということで駅周辺をわずかながらも離れ、流しのタクシーを待った。しかしこれがなかなか上手く行かない。道端で待っていて、反対車線の方に何台か続いたので道路を渡ってみると、なぜかピタリと来なくなる。そんな場所替えを数回繰り返し、半時間近く経過すると、気分的に落ち込んでくる。しかし意地もあるので頑張っていると、ようやく小型タクシーが流してきた。先ほどのメモを見せると3Lv(165円)ぐらいとの返事だ。ようやく事態が正常に動き始めた。

10分足らずの走行で、バヅラザデン広場に着いた。この広場に面して今宵の宿、ルネサンスがある。料金は3Lv少々だったが、5Lv(275円)紙幣を渡し、鷹揚に(?)、「釣りはいらない。」という。

バヅラザデン広場と左の2階建てがルネサンス、右がカフェ・スタリノ。

ホテル・ルネサンスで泊まった部屋。

プロヴディフ市街平面図　0 ━━ 400m

タクシーから降りると広場の向こうにあるカフェ・スタリノのテラス席に坐っていた中年男が立ち上がり手を振る。ルネサンスのオーナーであるディミタールだった。

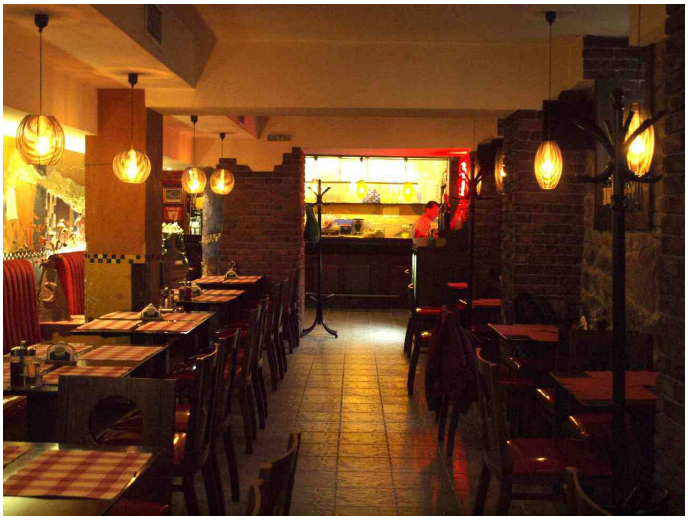
彼に導かれ宿のロビーに。ともかく部屋を見せて貰った。最初は一階の部屋で、内部に問題はないが、窓辺に佇むと周囲の家から見下ろされているような気分になるのが欠点だ。二階も見せて貰い、これならば満足と告げる。通常の一泊料金は、一階が50€、二階60€のところだが、10€まけてくれた。

シーズンオフのせいか、他に泊まり客もないようで、客室数5のルネサンスは静まりかえっている。荷物を部屋に収めて一休み。肉体的にはくたびれていないが、満員のバスと、その後のタクシー探しで無意識のうちに緊張していたようだ。静かな室内でそれがほぐれて行くのが心地良い。

改めて部屋を検分する。趣味の良い内装だし、それなりに金もかかっていそうだ。部屋代がブルガリアの相場からすればだいぶ高いのもうなずける。しかしそれにしては冷蔵庫がないのが少しばかり意外だ。もっとも最近は飲み物などは冷やさず飲むことが多いので、冷蔵庫なしもあまり気にならない。一休みを終えてフロントにいたディミタールにお奨めのレストランを教えて貰い、食事に出かけた。

教えられたガストは、繁華街の方へ向かう途中で、徒歩5分のところにあった。中に入ると2時半を回っているのにかなりの混雑だ。禁煙席は階下だと云われ、地下へ降りるとこちらはがら空きなので、一階は食事以外の客が多かったのかもしれない。

お品書きを見るとイタリア料理が多いようだ。何となくピザでも食べたい気分になっていたから、渡りに船といったところだ。店の特製サラダと、ピザ・クアトロフォルマッジョ（チーズ4種類）の30センチに、トッピングの追加としてマッシュルームとモッツァレラを指定した。ワインはリストからトドロフの赤で2009年ものを頼む。どんなワインか皆目判らないものの、ブルガリアワインでこれまでのところ外れは1回もなかったので安心して注文できた。



ガストの地下席。

サラダは盛り付けも洒落ていたが、オリジナルのソースが美味い。ブルガリアとしては量が少ない、つまり私にちょうど適当な分量だったのも良かった。ピザはソース、トッピング焼き具合などは満足だったが、小さい方を選んだのにやはり多過ぎた。抵抗を感じながらも耳の部分は残す。ワインは全く問題なし。

この日も最後はミルクコーヒー。勘定はワイン21.9Lv(1,203円)、サラダ3.59Lv(197円)、ピザ6.49Lv(356円)、トッピング(マッシュルーム)0.3Lv(16円)、トッピング(モッツァレラ)0.99Lv(54円)、コーヒー1.29Lv(71円)、ミルク0.4Lv(22円)。

上:サラダ。下:ピザ。

## プロヴディフ旧市街(歴史地区)

ガストを出て宿の前まで戻ったが、そのままもう少し街歩きを続けることにした。宿の面するバヅラザデン広場は、旧市街への南側入り口ともいえそうな場所で、ホテル・ルネサンス左手のスラヴェイコフ通りを行けば、沿道には築100年を越していそうな、重厚感に溢れた木造建築が建ち並んでいる。

石畳の道は緩い上り坂だ。いにしえのプロヴディフは三つの丘の上に築かれたが、そのうちでもっとも古くから城壁で囲われていたのがこの辺りだ。今となっては城壁の遺跡を見られる場所はほとんどない。

緩い坂を登り詰めると、T字路に突き当たった。左手にはヒサル門、右手には(名称不明の)教会の鐘楼が見える。ちょうど老人のアマチュアカメラマンが鐘楼を中心に撮影を繰り返していたので、前を横切るのをしばらく待つ。

プロヴディフ歴史地区平面図 0 100m

### プロヴディフ旧市街

プロヴディフの歴史は非常に古く、紀元前3千年頃に居住が開始され2千年くらいから城壁に囲まれた都市があったらしい。

交通の要衝にあったため、この街を支配下に置こうとした列強は多い。紀元前4世紀にフィリッポス二世(アレクサンダー大王の父)に征服され、フィリッポポリスと呼ばれるようになった。その後、ローマが支配し、バルカン半島で最も重要な軍事道路がこの街を通過していた。

その後、中世にはブルガリア帝国と東ローマ帝国はこの街を巡って度々抗争を繰り返す。14世紀になり、オスマン帝国がブルガリア全土を制圧し、プロヴディフもその支配下に入る。19世紀後半に入り、民族復興運動が次第に激しさを増していった時期には、ルメリア東部における運動の中心地となった。

一方この民族復興運動時期にも、現在旧市街と呼ばれている地域には富裕な商人が多く居住していたので、大邸宅が建設された。現在も多くが残っているため、この辺りは歴史的保存地区に指定されている。

スラヴェイコフ通り。

正面には民族復興期邸宅の中でも豪壮な部類に属するゲオルギアディ・ハウスが聳えている。現在は歴史博物館となり、館内を見ることができるが、これは先延ばしした。左へ曲がりこの辺りに城壁があったことを示すわずかな証拠であるヒサル門をくぐる。小さな広場状のところにでた。

左手には聖コンスタンティン・エレナ教会の鐘楼が見える。この教会はその起源を304年まで遡る由緒あるところだが、内部は撮影禁止であるばかりか、イコノシスタに多少の豪華さを感じたものの、面白いところではなかった。

広場から南へ緩い上り坂がネベット・テベ遺跡へ続くが、此処の訪問も先延ばしにして西へ下る。由緒のありそうなホテルがあり、看板を見れば1800年の創業らしい。後で英ガイドを調べたらお奨めの一軒だった。しかし料金もシングルが135Lv(7,414円)と、ブルガリアとしてはかなり高価だ。

聖母教会の塀。重厚さが際だつ。

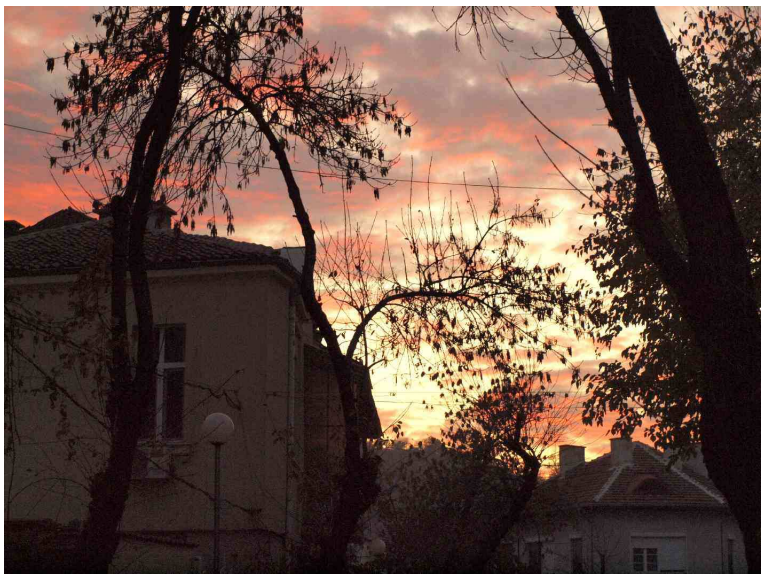
何となく雰囲気が良くて、何となく地元の連中が行きそうな食堂を見付けて、明日の昼飯は此処にしようかと記憶にとどめた。名前はブルガルスカ・クシュタ(ブルガリアの家: Българска къща) だった。

そのまま進むと、旧市街から外れそうな雰囲気なので、少し引き返し、別の枝道を辿る。かなり街路は錯綜し、迷路歩き的な気分を味わえる。立派な鐘楼が見えたのでそちらへ行ってみると、聖母教会だった。一応内部も覗いてみたが、面白くなかった上に撮影禁止だ。内部を一巡りして退出した。

緩い坂道を下ると、ツェントラレン広場から北に延びている繁華街の外れにぶつかる。ジュマヤ広場があり、その右側には同名のモスクがある。

この広場地下からローマ時代の競技場が発掘された。全体の規模は縦横が190メートルと25メートルで3万人を収容できたらしい。発掘されたのは、北端のごく一部だが、生憎現在は工事中だった。発掘の拡張ないしは既に発掘されている部分をより見易くする工事らしい。観光シーズンを避けての施工らしく、オフシーズンに旅するデメリットはこんな所にもあった。

ジュマヤモスク。



旧市街の夕焼け。

しかし遺跡見物はそれほど好むところではないので、別段気に留めることもなく散策を続けた。旧市街が位置する丘の麓を辿るつもりで南へ向かう。しかし道路はカーブを繰り返し、日が暮れてしまうと方角が判らなくなる。以前から方向音痴に気味があることは承知しているだけに、「アブナイな。」と独りごちつつも、ともかく歩くしかない。

やがて大きな広場に出た。これならば英ガイドの地図を見せて現在位置を訊くことができそうだ。そばにあった商店に入り、掃除をしていたオバサンに英語で尋ねる。ところが英語が通じないせいか、けんもほろろの対応に、怖じ気を振るって退散した。

少し反省し、英語を喋る人間がいそうなところを狙う。Olympusの看板がある、(多分商社系の)オフィスに入った。目論見は成功し、対応してくれた30くらいの男性は、親切に現在位置を教えてくれる。重ねて礼を述べて、そこを出る。ツェントラレン広場にいたのだ。

200メートルほど北へ行けば、先ほど食事したガストがある。迷って歩きながら、ほとんどその脇を通過したはずなのになぜか見落としている。狐に摘まれたような気分だった。宿へ戻る道すがら、ミルク2リットル3.8Lv(209円)とウォッカ(アラスカ)700cc8.5Lv(467円)を購入。

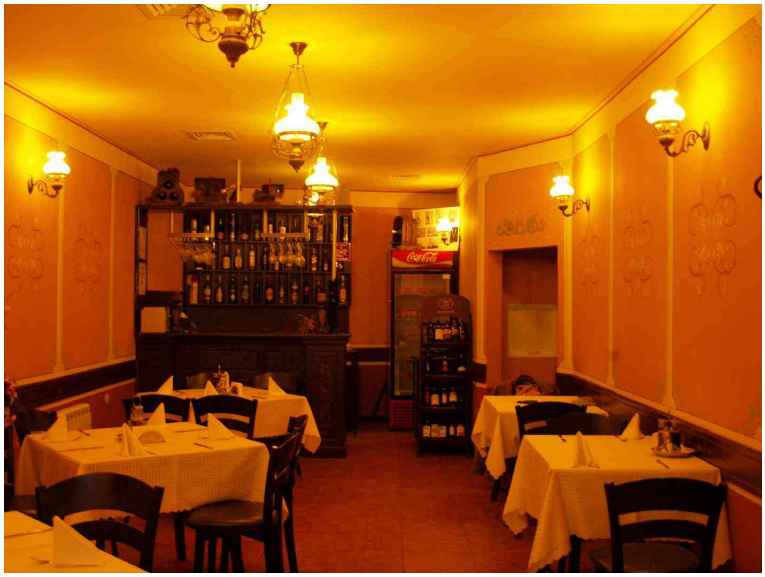
宿のフロントにはディミタールがいて、傍らの小柄な老人を紹介してくれた。夜間は彼がフロントを担当し、英語はしゃべれないが問題があって彼に云えば、電話でディミタールに繋いでくれるそうだ。

部屋に戻り、シャワーを浴びてから、おもむろに晩酌を始める。バヅラザデン広場の東に隣接する通りは交通量が多そうだったのに、部屋に達する騒音はほとんどなかった。翌朝、夜明け頃に隣家の大型犬が甘えたような声で吠えるのが聞こえる。餌か散歩をねだっているらしい。かなり大きな声だが、犬好きとしてはうるさいと思わず、むしろ姿が見たくて窓辺へよる。しばらく眼下の庭を見下ろしていたが、結局犬の姿は見えなかった。

ウォッカ。ラムの小瓶がおまけに着いていた。

### インターネット

8時に半地下の食堂へ降りる。シーズン中はレストランとして営業しているらしいが、今は朝食のみで、そして宿泊しているのは私一人だ。ディミタールが笑顔で迎えてくれて、飲み物を訊くので、ミルクコーヒーを頼んだ。厨房から小柄で30代半ばに見える女性が姿を現すと、ディミタールは妻だと紹介してくれる。ブルガリアは美女が多く、彼女もそうだった。まだすんなりとは出てこないドブロウートロを絞り出すと、頬笑みながらドブロウートロと返してくれる。英語は話さないらしい。



宿の食堂。

宿の朝食。色温度設定を間違えたため、大幅に赤味の強い画像になり、それを無理に修正したため色調がおかしい。

乳製品専門店。ショーウィンドウには（グーグル翻訳によれば）、チーズ、牛、羊、山羊、プロセスチーズ、サダノー・ムラコ（ヨーグルトアイスクリーム？）、ヨーグルト、ミルク、バター、ケフィア（アイラン：発酵した乳飲料）、タラトール（ ヨーグルトの冷たいスープ）、カード（凝乳）などが書かれている。

間もなく彼女が運んできた皿には、茹で卵、チーズ、トマト、胡瓜とバターやジャムも載せられ、アルバナシでの朝食に次ぐ、ボリューム満点のものだった。しかしとても食べきれない。

ディミタールが、明日の朝食メニューに関しての要望を訊くので、ハムエッグをしかし量は少なめに、トーストも1枚で良いことを伝える。

9時半に出かけた。見物すべきであろう旧市街は、昨日通過しただけだったが、この街に後2泊するつもりになっていたので急がない。それよりも13日にトリャヴナでアクセスして以後が未読になっているメールをチェックしたかった。

インターネットカフェの所在も含め、情報収集のために観光案内所を訪ねた。スタッフはオバサン二人で、どちらも流暢に英語を話す。毎度の手順で、まず市街平面図を貰った。次いでこれにインターネットカフェと本屋の位置をマークして貰う。担当してくれたオバサンは、単に場所を書き込むだけではなく、案内所からの道順や、カフェ周辺の状況も説明してくれる。これは後刻、実際に道を辿るとき何かと役立ってくれた。

通常であればさらにスーパーマーケットだとか、次の訪問地への行き方などを訊くが、今回そんなことはディミタールの方が気楽に相談できる。それでも判らなかった場合は、明日も一日この街にいるので、案内所を再訪するつもりだ。

地図を参照したり、先ほどの説明を思い出したりしながら慎重に歩いたが、それでも案内所から10分足らずでインターネットカフェに辿り着いた。古ぼけたビルの1階にある。ドアを開けると二部屋の元事務所風のところだった。受付替わりのデスクがあり、若い男が坐っている。インターネットにアクセスしたい旨を伝えると、奥の部屋に置かれた10台ほどのPCから、1台を指定された。先客は大学生風の女性が一人だけだ。

起動してみると、予想通り日本語が文字化けする。しかし受付の男にそのことを告げると、デスクからウィンドウスCDを取り出し、（脇で見ていて、ブルガリア語の画面は理解できなかったけれど）拡張言語のインストール辺りをやってくれた。しばらく待たされたものの、問題なくメールを読むことができる。

インターネットカフェが入居するビルに入り口に取り付けられた看板。

歩行者専用道路クニャズ・アレクサンダル・バテンベルグ通りのテラス席。ゆったりしたスペースと洒落た佇まいが羨ましい。こんな所で食べれば、マクドナルドのハンバーグだって中々のものだろう。

結局メールに関する収穫はなかったけれど、チェックできたことで気分的にはすっきりする。その他情報収集などで1時間10分使用し、料金は1.1Lv(60円)だった。実に安い。

カフェを出て本屋へ行くために、ツェントラレン広場を横切り、クニャズ・アレクサンドル・バテンベルグ通りを北へ向かう。本屋の方もカフェ同様に案内所の行き届いた説明のお陰ですんなり見付けることができた。

レジにいた女の子に地図を探していることを伝えると、英語は問題なく通じたものの、彼女が見せてくれたのは、「ブルガリア観光絵地図」もどきのものだ。そんな子供だましのものではない本格的地図が欲しかったので、そこら辺をいささかしどろもどろではあるが説明した。

彼女は自分の手に余ると思ったのか、店の奥にいたオジサンを呼び出す。改めて希望を述べると、彼が案内してくれたコーナーには道路地図などが置かれていた。その中にA1ぐらいの用紙に、縮尺54万分の一のブルガリア全土をカバーするものがあった。理解しがたい変な縮尺はともかく、これがあれば旅の全貌が浮かび上がるし、今後の計画にも役立つと思った。料金は2.8Lv(154円)と、これも格安。

ツェントラレン広場付近にあるローマ時代のフォロ遺跡。

本屋。книги が図書を意味するらしい。

新市街での用事も終わったので、一旦宿へもどることにした。バヅラザデン広場の手前に野菜の屋台市場があり、前から気になっていたので旧市街への途中立ち寄った。どの野菜も瑞々しく見えて美味そうだ。久しぶりに見かけた赤カブを買う。記録し忘れたため、価格はわからなくなってきましたが、安かったことは確かだ。

野菜市場。

指呼の間にある宿に戻り、部屋に赤カブを置いた。ちなみにディミタールから、「鍵はフロントに預けないで持ち歩いていいよ。」と云われているので、出入りするときの煩わしさがない。

つい今しがた買い求めた地図を拡げ、今後の計画を立てる。今まではほぼ行き当たりばったりで、引き続きそれでも良いのだが、日数的に半分を過ぎた今は、全体的に眺めるのも良かろうと思っていた。地図にマーカーで、既に訪れた地とこれから行っても良いかなと思うところに印を付けた。

ブルガリア全土で、南部と北部は空白、中央部の東半分に点々と訪問済みの地があり、プロヴディフはブルガリアの中央から若干ながら西によったところだ。既に此処まで戻ってきているので、東部はこれから訪れる対象から外す。

主たる観光地として、日ガイドには27箇所が記載され、これまでに一応頭に入っている。地図を眺めて、これはと思えば日ガイドを紐解き、主に日ガイドの写真でその地の雰囲気を思い描く。さらに記事を読んで情報を補う場合もある。日ガイドには交通手段などは一切触れていないので、行く気が起きれば、英ガイドを開いてアクセスを調べる。ブルガリアではタクシーという手段もあるのでここら辺はかなり気楽だ。

結局2時間弱大雑把にあれこれ探した結論は、まずプロヴディフの20キロほど南にあるバチコヴォ修道院を訪れ、その後にコプリフシティツァへまわり、さらにリラ修道院、バンスコ、メルニックなどのどれかに行こうかという気になった。

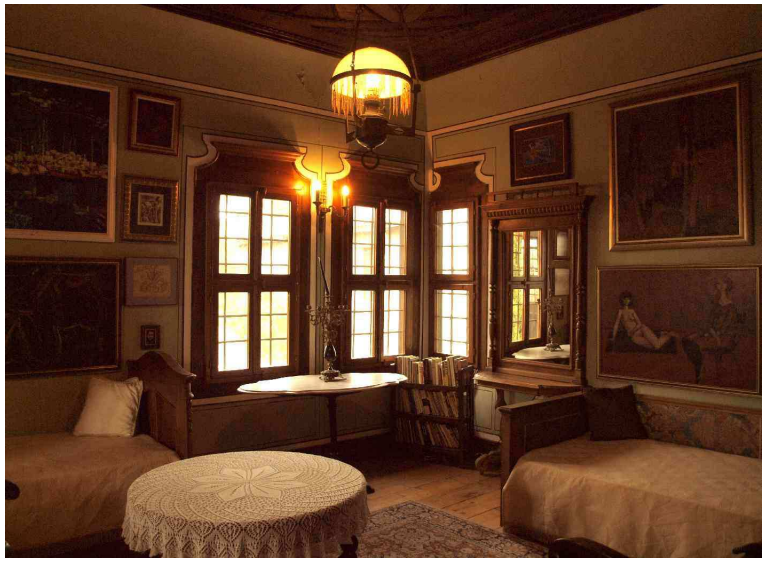
## 旧市街彷徨

あれこれ行き先を検討しているうちに、1時半を回っていた。明日もあるので見物を急ぐ必要は無いけれど、腹も減ってきたので食事がてら旧市街見物に出かける。昨日同様、スラヴェイコフ通りを突き当たりまで行き、現在は歴史博物館となっているゲオルギアディ・ハウスをじっくり鑑賞した。しかし内部の展示を見るのは後回しにして聖コンスタンティン・エレナ教会のある四つ辻へ。

この辻を右に曲がると、すぐのところに民族博物館がある。トルコ商人アルジル・クユムジョグルの旧宅で、プロヴディフ様式(別名ブルガリア・ルネサンス様式)の最高傑作と思われる。しかし門から屋敷の方を見ると、小学生くらいの団体がうろうろしていたので、こんな連中と一緒ではおちおち見物もできまいと、そのまま石畳の道を先へ進む。

左手に博物館らしい、やはりプロヴディフ様式の建物があり、公開中らしいが人気(ひとけ)はあまりなかった。門を入るとオバサンが一人タバコを吸っている。博物館のスタッフらしいが、館内が禁煙な

上はゲオルギアディ・ハウスで、下が民族博物館。どちらも大工ゲオルギアディによる。玄関屋根の曲線や、玄関上の張りだし、外壁の装飾などはプロヴディフ様式と呼ばれる。



レッド・ポニーの内部。

ので此処にいるらしい。彼女に内部を見ることができるか確認して、建物に入る。有料であったかは不明になってしまったが、多分2Lv(110円)ぐらい支払った。

当初はハウスミュージアムと思っていたが、アテヌス・クリスティヴ(1922～2003年)なる作家、詩人、画家であった人物の作品を展示するレッド・ポニーというギャラリーだった。作品は理解できないのでつまらなかったが、建物の雰囲気は良い。10分ほどかけて1階、2階の4部屋を廻る。

オバサンに礼を云ってギャラリーを後にし、再び石畳の道を辿る。20メートルほどで石畳は途絶え、空き地に出た。丘の頂上にあるネベット・テベ遺跡だ。

ネベット・テベ遺跡。遠景はマリッツァ川の北に広がる新市街。

発掘調査により、この丘には紀元前3千年頃から人が住み、前2千年頃から外壁を備えたトラキア人の聚落があったことが判明した(日ガイド)。しかし眼前にある石積みがいつの時代に築かれたものなのか、説明板といったもののないばかりか、どちらかといえば遺跡全体が、うち捨てられたようになんの保護態勢もないままに曝されていた。

ネベット・テベ遺跡が旧市街の北端に当たるので、引き返す。エレナ教会の四つ辻からさらに南下する。こちら方面ではラマルティーヌ・ハウスが有名らしいけれど、建物としての価値は低いと思う。ちなみに呼称は、この屋敷にフランスの詩人、著作家、政治家。ロマン派の代表的詩人であるラマルティーヌが滞在したことにちなむ。現在博物館となっている内部には彼が書いた原稿などが展示されているそうだが、ラマルティーヌなどさっぱり知らなかったので、興味も全く湧かなかった。

ラマルティーヌ・ハウス。

道路清掃のオバサン。黄色いチョッキはお仕着せだろうが、赤いスーツはどうなのか？ともかくコンビネーションも良く、くすんでいないところも好ましい。

上左：ワインをデカンタで頼む。上右:ショプスカサラダ。
中左：串焼き。中右:串焼きをバラしたところ。
下左：ミルクコーヒー。下右：店内（ほぼ）全景・

旧市街の面積はごく限られたもので、一通りの街路は歩き尽くした。博物館の内部見物はまだだけれど、それは先延ばしにして昼飯にする。昨日見付けたブルガルスカ・クシュタへ向かう。

2時半を回っていたせいか、店内に客はおらず、女将風の女性が一人手持ちぶさたそうな表情でカウンターの傍らに佇んでいた。窓際のテーブルに席を占める。お品書きは場所柄観光客を意識して作られていて料理の写真入りなので、ブルガリア料理初心者には判りやすい。
ワインはデカンターで頼めるのでハウスワインの赤を500cc注文。食べ物はショプスカサラダに肉と野菜の串焼き（シャシリク: **шашлик**）にした。お品書きに書かれているので材料は判るものの、実体は不明だ。それでも添付されている写真からすると期待しても良さそうだった。

通常通りワインはすぐに、ショプスカサラダも大して待たされることなく運ばれてきた。ワインはデカンターで頼んでいるから、銘柄も判らないけれど美味かった。もとよりワインの味をとやかくいう気はないのだけれど、旅先で安物を注文すると、時として癖のあるものを飲まされることがある。ところが今回の旅に関してはそんなことが丸でないのだ。ブルガリアワインの知名度は、少なくとも日本において低いものだが、もっと評価される日が来るのかもしれない。

串焼きが15分待ちで登場したのは意外だった。かなり大振りの肉塊や丸ごとのタマネギに火を通すのだから仕込みを含めて半時間くらいかかっても仕方ないと思っていた。ともかく串に刺した状態で数枚撮影し、串から外して皿の上にバラし、早速食べ始めた。

期待以上に美味い。ショプスカサラダ、ワインを加えての相性も良い。惜しむらくは量が多いので食すのに時間がかかり、最初は熱々だったのが、最後には冷え冷えになってしまったことだ。こんな時は、「三人くらいで複数種類を注文し、時間差を付けて供して貰い分け合えれば. . . .」など、一人旅の弱点をしみじみ思うのだった。グラスワイン一杯を追加し、1時間かけたが全部を平らげることはできなかった。それでも

ブルガルスカ・クシュタの裏口にいた猫。飼われているのか不明だが、毛並みは綺麗だった。

ウィンドウに飾られた子供用下着シャツ。この方面は全く無知だが、日本アニメの影響を受けているのだろうか。価格は１枚5Lv(275円)だった。

ショプスカサラダの方は何とか完食し、串焼きの残りは持ち帰りにする。

最後をミルクコーヒーで仕上げて、勘定は串焼き14.49Lv(796円)、デカンター・ワイン500cc 4.99Lv(274円)、グラス・ワイン200cc1.99Lv(109円)、ショプスカサラダ3.99Lv(219円)、カプチーノ1.79Lv(98円)だった。半端な値段を好む経営者だ。

聖母教会の鐘楼。

晩酌のツマミにした赤カブと持ち帰り串焼き。

外へ出てみると、食事の間に青空が広がっている。店の前から眺める聖母教会の鐘楼は、午後の太陽光線を浴びて美しく輝いていた。

繁華街の方へ迂回し、ウィンドウを眺めながらぶらぶら宿へ向かう。部屋に戻ったのは4時半近かった。その後は外出せずに、6時近くなって晩酌を始める。野菜市場で求めた赤カブは葉を切り落とし、さらに根球部分を四つ割にする。食べるときに持参の食塩を振りかけた。

持ち帰った串焼きは冷え切っているのが難点なれど、それなりにツマミとして食べられる。晩酌を終えると、この日も早々就寝した。

朝食のハムエッグ。

## カード・キャッシングの返済

18日も夜明け頃に隣家の大型犬が吠える。何とか姿を見たいものだと思うが、この日もかなわなかった。

8時に食堂へ降りるとディミタールと連れ合いが笑顔で迎えてくれる。朝食は昨日のリクエスト通り、ハムエッグだ。陶器の皿に材料を入れ、オーブンで焼くようで、多少時間がかかるものの、フライパンなどで作ったものより美味いような気がする。

食事しながらディミタールにコレクトコールを利用したときの料金について尋ねる。キャッシング利用額を調べるためだ(P.20「海外キャッシング方法比較」、P.22など参照)。彼の説明では、電話をかけた先がフリーダイヤルなのか、料金が発生するかは、電話会社から請求書が来るまで判らないので、ブルガスで料金を請求されたように、此処でも請求することになるという。

格安国際電話ブースの看板。下の方に(多分)料金例。いずれも1分辺り、ヨーロッパ0.06Lv(3円)、ブルガリア0.12Lv(7円)、携帯電話0.39Lv(21円)。格安だがなぜ国内の方が高いのだろう？

キャッシングの利息は、仮に10万円借りたとして、1日当たり41円だ。これより高い電話料金であれば早期返済を試みることは逆効果になる。そんなことを考えていると、彼が、「安い国際電話を利用する方法がある。私もしばしば米国の兄と話すときに利用する。」と話し出した。昨日利用したインターネットカフェのほとんど隣に、格安国際電話のブースがあるらしい。

この類のサービスは、日本でこそ見かけないがシチリアやポーランドでは珍しくないし、一度くらい利用したような気もする。どうせ今日もインターネットカフェには行くつもりなので、その際に電話も試すことにした。

朝食後に部屋でぐずぐず過ごし、9時を廻ってから出かけた。電話やネットは午後にするつもりで、度々歩いているスラヴェイコフ通りをヒサル門の方へ行く。しかし聖コンスタンティン・エレナ教会の四つ辻に達したところで、キャッシングの問い合わせは、日本の業務時間内にしなければならないことを思いだした。日本との時差は7時間なので、午前10時までに電話しなければならない。おまけに今日は金曜日なので、これを逃すと次の街で格安国際電話を利用できるとは限らない。

踵を返してネットカフェの方へ足を急がせる、向こうから30人ぐらいの団体がゾロゾロ歩いて来る。50メートルくらい離れていても、一目で日本人と判った。この連中と擦れ違い、ふと感じたのは、「一日40円の利息を節約するために、時間と労力を浪費しているのではないか？」の思いだ。何となく自己嫌悪に近いものが湧き上がる。しかし、「格安国際電話も、キャッシングの海外からの返済も、共に取材だ。」と自分に云い聞かせた。

格安国際電話の看板は簡単に見付かった。ネットカフェ同様、古ぼけたビルの片隅にある6坪くらいの小部屋に、カウンターとそれに向かい合うように公衆電話ボックスもどきの仕切られた区画があり、そこで電話をかける。カウンターにいた女の子に云われたボックスに入り81の国際コードから始めて、カード会社キャッシング部門の番号をプッシュする。

なんの問題もなく繋がり、返済すべき金額を訊くことができた。通常であれば月曜日の振り込みなのでその分の金利を足したものを振り込まなければならない。しかし三菱東京UFJ銀行からの振り込みであれば、日本時間の午後6時までに手続きすれば今日中に返済したことになるそうだ。一応二通りの金額と振込先口座を訊いてメモする。

目の前に小さなメーターがあり、通話時間と料金が表示される。あまりにも安いので、半信半疑であったが、ボックスを出てカウンターへ行くと、請求されたのは表示通りの0.65Lv(36円)だった。6分17秒の通話だから、日本の国内通話より大幅に安く、通常安価とされるIP電話と比較してもさらに安い、1分当たり6円弱の料金だ。なぜそんなことが可能なのだろう。

ともかく詮索よりも当初の目的をまず完遂させる。ほとんど隣にあるインターネットカフェに行き、ネットバンキングで87,437円の振り込み手続きを行った。外国にいて、日本の銀行から振り込みができるのは、原理的に納得しているものの、いざ体験してみると、かなり現実離れした感触だった。

ボックスごとにある料金メーター。上が分秒、下が料金。

## ハウスミュージアム

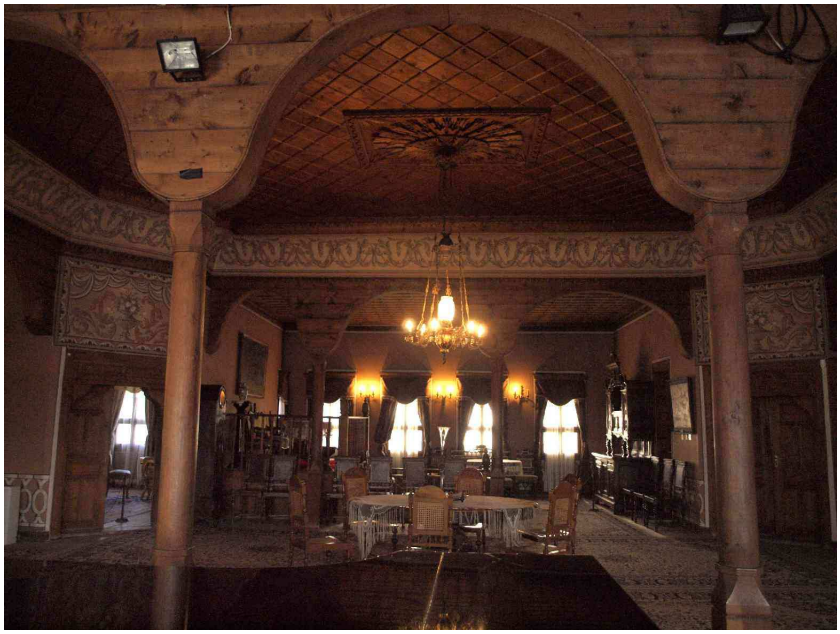
ネットバンキングを終了し、メールをチェックする。旅立つ直前に完成し、回覧中のシチリア紀行に関して、「製本がばらけ始めた。」という読者からのメールがあった。平謝りし、帰国する12月1日頃を目途に、返送をお願いする。

ちなみにブルガリアのネットカフェなどでは、日本語を表示できても入力ができないのが常であったのに、このネットカフェは幸い例外だった。

上左：湧水を利用した水飲み場だろうか。ともかくブルガリア人は街中にこのような芸術品を置くのが好きらしい。上右：何を意味するのか不明だが、木彫の力作。下左：古代ローマ競技場遺跡。下右：聖母教会のそばで見かけた車。風変わりなので一応撮影しておいた。執筆にあたり調べると、レッドブルなるエナジードリンク（一般的には疲労時や気合を入れるときのエネルギーチャージを目的とした炭酸飲料の総称）の宣伝カーだった。車内に冷やした缶入りレッドブルを積み、通行人に配る。日本では2005年から販売され、このような車利用の宣伝も秋葉原などで見かけるらしい。しかしTVを見ず、盛り場にもほとんど近付かないので、全く知らなかった。

ネットカフェを出て、この街で一番の目抜き通りクニャズ・アレクサンドル・バテンベルグ通りを北へ向かう。この通りの北端が古代ローマ競技場遺跡だ。現在修復工事中で、一昨日通ったときは工事現場外周に設けられた仮設塀により何も見えなかった。ところが今回は、昼間なので作業員が出入りするためか、仮設塀の一部が開かれている。そのお陰で遺跡を垣間見ることができた。

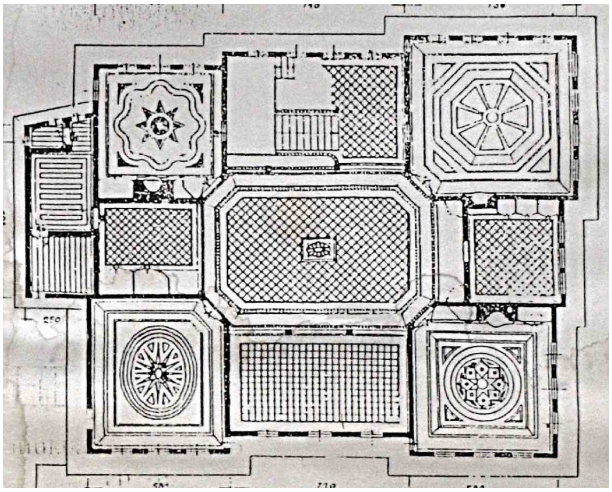
競技場遺跡から東へ向かうと聖母教会などがあり、緩い坂を登ってプロヴディフ旧市街へ入る。聖コンスタンティン・エレナ教会の四つ辻を左折してちょっと坂を下ると、バラバノフ・ハウスがある。



バラバノフ・ハウスの二階。

3Lv(165円)の入場料を払って中へ。1階は元々倉庫だったらしいが、現在はギャラリーになっている。これには興味を惹かれず、素通りして2階へ。この屋敷は19世紀初頭にブルガリア人の商人であり高利貸しもしていたハジ・パナヨットにより建てられた。最後の持ち主がルカ・バラバノフなのでバラバノフ・ハウスと呼ばれている。

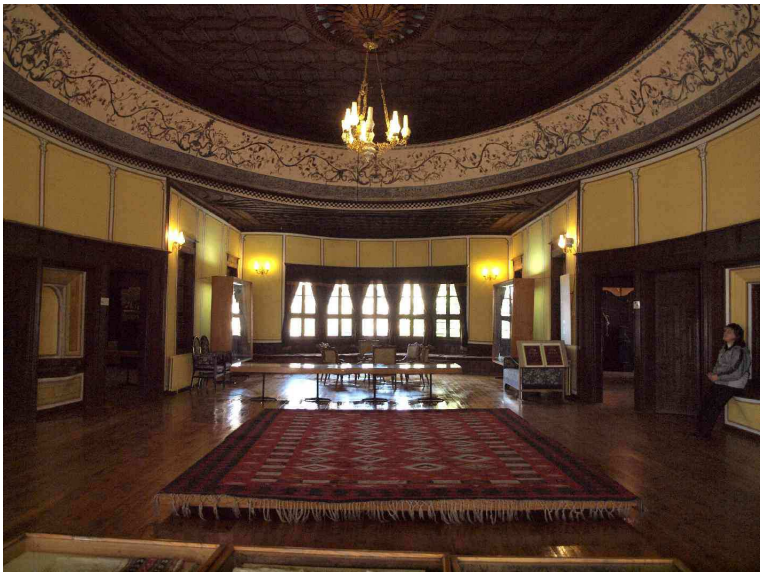
しかしオリジナルは1930年代に取り壊され、現在のものは



バラバノフ・ハウス二階の平面図。十字型に大広間があり、四隅に四つの部屋を配す。

バラバノフ・ハウス二階の四隅に配された部屋の一つ。

ヒンドリアン・ハウスの外観。



民族博物館二階の大広間。

1980年に復元されたものだ。見たときにはこのことを知らなかったので、何となく騙されたような気分になる。

この屋敷を見て奇異に感じるのは、寝室や厨房、そして小部屋がないことだ。憶測するならば、住居としてではなく商談や宴会の場として使用すること目的で建築されたのかもしれない。その場合は厨房は一階のどこかにあったのだろう。

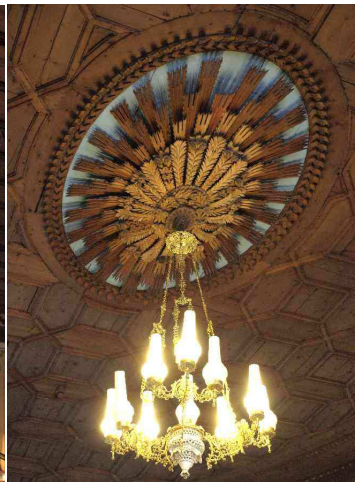
バラバノフ・ハウスを出て、隣接するヒンドリアン・ハウスを訪ねた。英ガイドにはこの家のことを、「プロヴディフでもっとも華麗なものの一つ. . . .」と紹介していた。しかし建物の前まで行ったものの、なぜか内部を見たい気持ちにならず、外観を撮影しただけで踵を返した。

エレナ教会の四つ辻まで戻り、左折するとすぐのところに民族博物館がある。昨日は小学生がいたので敬遠したところだ。今日は打って変わった静けさで、館内にはスタッフが二人所在なさそうにしているだけだった。入館料5Lv(275円)と撮影料5Lvを合わせ10Lv(549円)支払った。

BOMB(Base of Museums in Bulgaria)によれば館内展示品は、「ブルガリア革命期におけるプロヴディフ地域・ロドピ山脈・スレドナ・ゴラ地域の伝統的なや精神文化を紹介しています。農業と畜産、家屋向けの工芸品、陶器、金属製工芸品、民族衣装、コプリフシティツァ・ ロドピ地方・プロブディフ地域のインテリア、楽器、儀式用の祭礼品。」だそうだ。しかし此処に限らず博物館に並ぶ品など見ても、興味を惹かれることは先ずないので、むしろ部屋そのものを見て歩くような気分で館内を巡った。

先ほど見たバラバノフ・ハウスやトリャブナで見たダスカロフ・ハウスなどと比べても、此処の豪華絢爛さは際だつように感じられる。この屋敷が建てられた時代に、プロヴディフはイスタンブル、エディルネ、

1階ホールのシャンデリアと天井の細工。



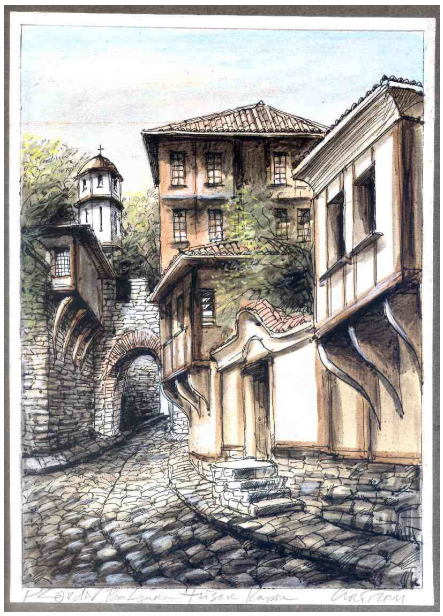
2階のシャンデリアと天井の細工。

民族博物館のファサード。

テッサロニキと並ぶオスマントルコ帝国の重要な経済拠点だったから、発注者である商人アルジル・クユムジョグルの資産も莫大なものだったのだろう。

しかし贅を尽くした造作をみて、その壮麗さに舌を巻くことはあっても、「ここに住んでみたい。」とは思わないのが毎度のことだ。貧乏人の僻みと云われるかもしれないけれど、豪華絢爛は安らぎより疲労に結びつく。

民族博物館を出ると、門前で水彩画を展示販売していた。いずれもプロヴディフの旧市街をスケッチしたものだ。しばらく眺めていると、売り手の老婦人は、「どれも私の連れ合いが書いたものだ。」と説明してくれた。厚紙に画用紙を貼り付けたものなので土産にするのに、嵩張らないし壊れる心配もない。値段も大したことはなく、記録しなかったので不明になってしまったが、40Lv(2,197円)程度だったので1枚買う。ヒサル門とエレナ教会の鐘楼、などが描かれていた。



民族博物館門前で買った水彩画。現物はほぼA4サイズだった。

ヒサル門をくぐって、歴史博物館になっているゲオルギアディ・ハウスを訪ねる。玄関の扉は閉ざされ、押してみたが施錠されているようでびくともしない。休館しているのかと思ったが、扉の脇に注意書きが貼られているのに気付いた。ドアが閉じているときは上の呼び鈴を押せとのことだ。

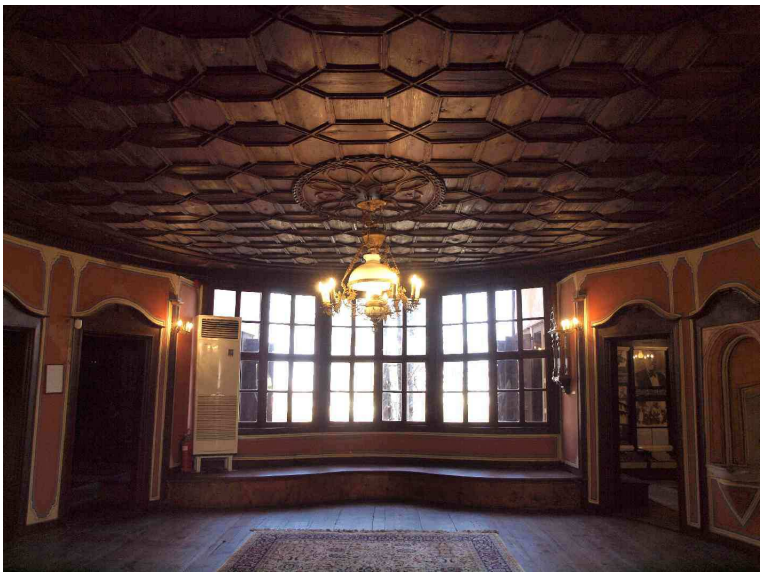
押してみたが反応がない。しばらく待ってもう一度押してみようかとしたとき、通りかかったオバサンが、「ここに入りたいのか？」と訊く。頷いて呼び鈴のことを話そうとしたが、彼女はつかつかと歩み寄ると、ドアに着けられている無骨なノッカーを力を籠めてガンガン叩き始めた。

呼び鈴とノッカーのどちらに反応したか不明だが、間もなく屋内から女性の声がすると共に、解錠されドアが開く。通りがかりのオバサンは、満足そうな笑みを浮かべながら、ドアを開けてくれたオバサンと数言会話して踵を返した。慌ててその背中にメルシーを叫ぶ。

手動印刷機。

中に入るとハウスのオバサンは扉を閉め、閂を架ける。樫類の木でできた閂は10センチ角はありそうで、いかにも頑丈だ。この屋敷ができた頃は、そんなものも必要とした物騒な世の中だったのだろう。2Lv(110円)を支払い入場券を買う。彼女は券を手渡しながら、「奥にいるので、見終わったら声をかけて。」と云い、隣接して建つ小屋の方へ姿を消した。

一応博物館なので展示品はあるものの、品数は少ないし、興味深いものもあまりない。その中で目を惹いたのは玄関の脇に置いてあった手動印刷機だ。18世紀初頭に民族復興期の活動が開始された頃には、まずブルガリア語によるいわゆる世俗教育に力が注がれた。自国語による読み書き算盤



ゲオルギアディ・ハウス3階のホール。

展示されていたフリントロック式拳銃。英文説明にはパナギュリシテ（プロヴディフの北西約60キロの街）の武器としか書かれていない。

と、歴史を学ぶことによるアイデンティティの回復だ。そしてその際に活躍したであろう機械が、此処に展示されているような、いささか時代遅れの手動印刷機だった。

しかしこの展示品には説明がなかったので、実際に何を印刷したのか、どこで使われたかなどは皆目判らなかった。階上へ移動しながら部屋々々を見て廻る。この屋敷をゲオルギアディに発注したのも裕福な商人だったのだろうが、クユムジョグルなどに較べればだいぶ財力的に劣っていたようだ。

3階には民族復興期の資料が色々展示されていた。しかしこの歴史的時期は、ブルガリア人にとって重要であり強い興味を覚えるのだろうが、東洋の異邦人からするとあまりにも馴染みのない世界で、此処の資料に付けられた英文の説明も全く読む気になれなかった。

それでも半時間ほどを博物館で過ごし、最後に先ほどのオバサンに声をかけ、門を開けて貰った。

聖マリナ教会の鐘楼。門の上に造られたそれは木造で、ヨーロッパにおいては珍しく、中国の塔を彷彿させる。

## 古代ローマ劇場

旧市街のある丘を下り、繁華街の外れにある聖マリナ教会へ行く。古代ローマ劇場のそばだし、日ガイドに載っている鐘楼の画像を見て面白そうに感じたためだ。しかし実物は珍しさはあるものの、それほど感銘を受けるようなものではなかった。

カメラアングルに変化が欲しく、鐘楼を見下ろすような位置を求めて階段を登ると、古代ローマ劇場を囲う鉄格子フェンスにぶつかった。こちらから劇場に行くことができれば好都合なのに、ゲートは閉ざされている。シーズン中ならば此処から入れるのかもしれないが、結局ジュマヤ広場まで行き、聖母教会の横を抜ける坂道を登り、約600メートルほどの道のりになってしまった。

こちらも鉄格子柵で囲われ、一箇所あるゲートの扉は開いていたが、紐が一本横に張られ通行できないことを示している。

前日、赤カブを買った野菜市場で白菜と大根を見かけた。さすがに買い込んでも処理しきれない。

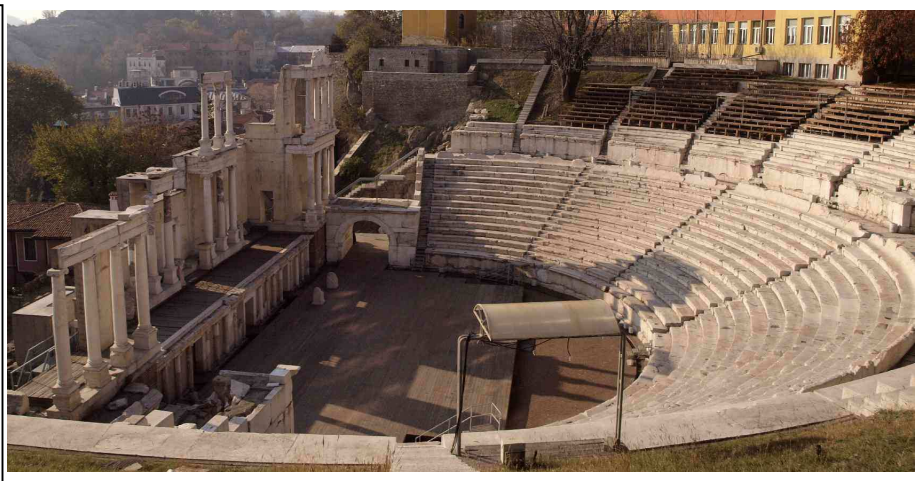
ローマ劇場の後背部。聖マリナ教会鐘楼を見下ろすような位置にあり、鉄格子フェンスにはゲートもあったが、閉ざされていた。

**プロヴディフのローマ劇場**

ローマ帝国の各地に建設された劇場は、ギリシャ劇場の影響を強く受けている。独自のスタイルとしてはスケネ（舞台背後の高い壁）を持つことや、独立した基礎の上に築かれ斜面などは利用しないものが多いことだ。もっともプロヴディフの劇場は斜面を利用している。

建築材料からみると、古代コンクリート（ローマン・コンクリート）の使用が特徴だ。このコンクリートは現代のポルトランドセメントを使用するコンクリートが50年程度の寿命しかないのに対し、強度が数千年間保たれる。さらには材料生産過程で加熱せずに済む（二酸化炭素を排出しない）など、現代では夢のような材料なのに、ローマの衰退後は中世の暗黒に呑み込まれ失われた技術だ。

プロヴディフのローマ劇場は規模としても大きく、オリジナルは客席が28段あり、7千人程度が収容できた。現在残っているのは5世紀に上部が破壊され20段だ。それでも音響効果の良さは失われず、毎年5月から9月まで、国際的オペラ祭、民俗舞踏祭、演劇祭、映画祭やコンサートの会場として活躍している。



ローマ劇場全景。

座席のなめらかなカーブは古代コンクリートか？

辺りをみると右手にガードボックスのようなものが置かれているが無人だ。紐を外して入ったものか逡巡していると、裏手の路地を飲み物片手のオヤジが歩いてきてガードボックスに入った。ようやく2Lv(110円)の入場券を買うことができる。

古代ギリシャ劇場と同様に、客席の勾配がきついのは音響効果のためだろうか。天井がないので客席を反響板としているのだろう。しかし見て廻るには足腰に堪える。中段の水平通路までは降りてみたものの、かぶり付きまでは行かずにお茶を濁した。

このような古代劇場を訪ねるたびに、本来の目的に適う、つまり観劇やコンサートの鑑賞をこの場でできればと思わずにいられない。とはいえ中年まではコンサートや観劇に夜外出することを厭わなかったのに、最近では全くの出不精になっている。だから例えば今晩、古典劇の上演があり、切符が買える状態だったとしても、いざとなれば尻込みしてしまうのかもしれない。

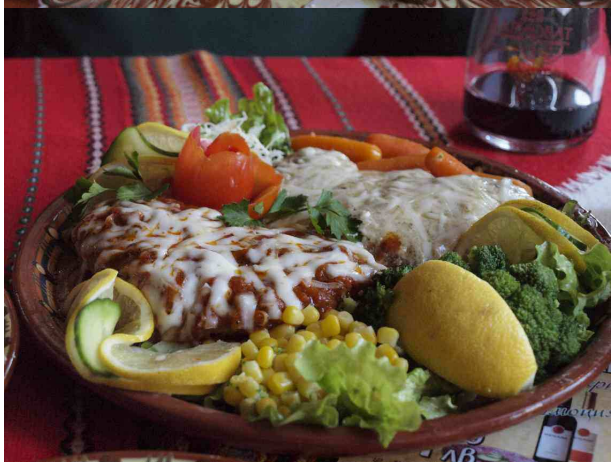
水平通路があっても、観客席全体の勾配が変わらないように、通路すぐ後ろの席は段差が大きい。階段も急になるため、場所によっては踏み面の少なさを補うため、穴が開けられている。

ローマ劇場を出ると2時を廻っていた。昼飯を摂るべく指呼の間にあるブルガルスカ・クシュタへ向かい坂を下る。店に通じる小径には門があり、脇に通行人を対象とした写真入りメニューが表示されていた。ボスの前菜（Boss's apetizer: **мезето на шефа**）を見て食指が動く。

ボスの前菜の見本画像。

店に入ると、この日も女将が一人暇そうにTVを眺めていた。昨日と同じテーブルを選ぶ。彼女が持ってきたお品書きを開くと、「ボスの前菜」画像が目に飛び込んできた。迷わずこれを指差すと、彼女はすかさず量のところを指す。落ち着いて見れば、なんと2,500㌘だ。思わずウヘーッの気分になったのが表情に出たか、彼女の目許に笑みが漂った。改めてお品書きを見直し、前菜としては一番量の少ない、それでも500㌘あるブルガルスカ・クシュタ特製前菜と、ショプスキスタイル・ホットポッ

ショプスキスタイル・ホットポットチーズ。



上：ホットポットチーズを皿に展開したところ。
下：ブルガルスカ・クシュタ特製前菜。

ジュマヤ広場付近の小公園。上は枯れ葉に埋もれて眠る野良犬三匹。下はおこぼれを待つ猫たち。

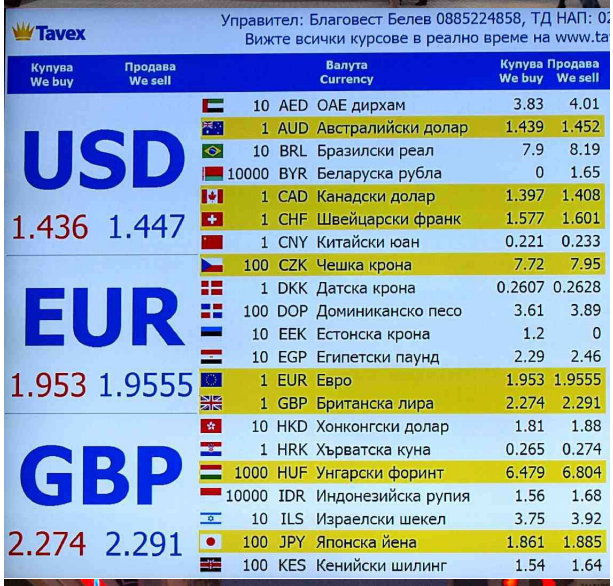
トチーズを素材で推し量り注文した。ワインはデカンタで赤を500ccにする。

ワインを飲みながら待つことわずか6分でホットポットチーズが登場する。トロヤン陶器ポットに入ってオーブンで焼いたらしい。時間が短いから、ある程度鍋で温めてあったのかもしれない。冷ますことも兼ねて取り皿に拡げてみた。要するに名前通りで、トマト、マッシュルーム、卵、ピーマンなどにフェタチーズが乗っているから、ショプスカサラダそのものだが、これがポットで熱々になっている。ベジタリアン向きの一品かもしれない。

順番が変だけれど、10分遅れのブルガルスカ・クシュタ特製前菜は豚肉と鶏肉に火を通し、揚げたパンの上に乗せてクリームソースと唐辛子ソースで線を描き交互に菱形を形作るようにかけてある。付け合わせは茹でたブロッコリーとカリフラワー、コーンだった。両方とも美味かったし、それ以上に食べていて楽しくなるような料理だった。

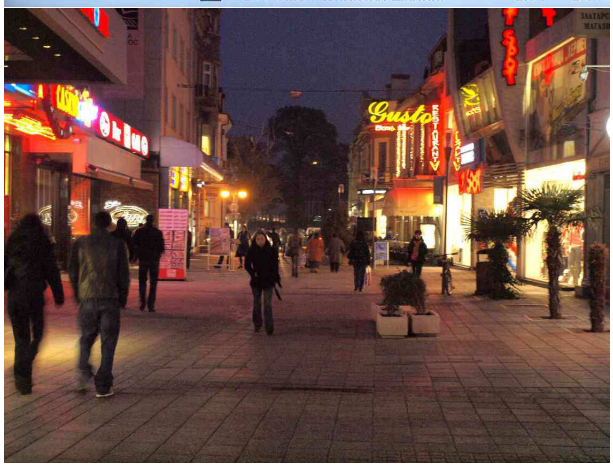
量的に少なく質的に軽かったので、半時間で食事を終える。勘定は前菜が14.99Lv(823円)、ホットポット3.99Lv(219円)、ワイン4.99Lv(274円)だった。

店を出て聖母教会脇を下り、ジュマヤ広場からクニャズ・アレクサンドル・バテンベルグ通りを南下して宿へ戻った。一眠りし5時にフロントへ行くとディミタールがいる。カザンラクで見付けることができなかったワインオープナー探



Tavex
Управител: Благовест Белев 0885224858, ТД НАП: 02
Вижте всички курсове в реално време на www.ta

| Купува We buy | Продава We sell | | | Валута Currency | Купува We buy | Продава We sell |
|---|---|---|---|---|---|---|
| USD | | 10 | AED | ОАЕ дирхам | 3.83 | 4.01 |
| | | 1 | AUD | Австралийски долар | 1.439 | 1.452 |
| | | 10 | BRL | Бразилски реал | 7.9 | 8.19 |
| | | 10000 | BYR | Беларуска рубла | 0 | 1.65 |
| | | 1 | CAD | Канадски долар | 1.397 | 1.408 |
| | | 1 | CHF | Швейцарски франк | 1.577 | 1.601 |
| | | 1 | CNY | Китайски юан | 0.221 | 0.233 |
| | | 100 | CZK | Чешка крона | 7.72 | 7.95 |
| | | 1 | DKK | Датска крона | 0.2607 | 0.2628 |
| | | 100 | DOP | Доминиканско песо | 3.61 | 3.89 |
| | | 10 | EEK | Естонска крона | 1.2 | 0 |
| | | 10 | EGP | Египетски паунд | 2.29 | 2.46 |
| 1.436 | 1.447 | 1 | EUR | Евро | 1.953 | 1.9555 |
| | | 1 | GBP | Британска лира | 2.274 | 2.291 |
| EUR | | 10 | HKD | Хонконгски долар | 1.81 | 1.88 |
| | | 1 | HRK | Хърватска куна | 0.265 | 0.274 |
| | | 1000 | HUF | Унгарски форинт | 6.479 | 6.804 |
| | | 10000 | IDR | Индонезийска рупия | 1.56 | 1.68 |
| | | 10 | ILS | Израелски шекел | 3.75 | 3.92 |
| | | 100 | JPY | Японска йена | 1.861 | 1.885 |
| | | 100 | KES | Кенийски шилинг | 1.54 | 1.64 |
| 1.953 | 1.9555 | | | | | |
| GBP | | | | | | |
| 2.274 | 2.291 | | | | | |




上：1€ショップ。100円ショップもどきだが、品揃えは圧倒的に少ない。中：銀行のショーウィンドウに表示されたレート。珍しく日本円もあった（下から2行目）。しかもクレジットカードのレートより良い。下：パトリアルフ・エフティミー通り。右手に初日食事した食堂ガストのネオン。

しを相談する。

「近くの店にあるかもしれない。」と身軽に動いてくれた。先に立ってバヅラザデン広場を横切り、通りを渡った万屋に入る。しかしこの店にあったのは探しているタイプではない。彼に礼を云って、新市街をもう少し歩くことにした。プロヴディフの滞在も今日が最終日だ。

いざそのつもりで探すと、意外に調理器具の専門店がない。半時間ほどクニャズ・アレクサンドル・バテンベルグ通りの店を見て廻り、ほぼ諦めて宿へ戻りかけ、喫煙具や紳士用品の専門店が目にとまった。駄目だろうと思いつつも店内に入り、女店員にカメラモニターのソムリエナイフ(P.97参照)を見せる。

彼女は笑顔で応え、店頭の方へ行き陳列棚から木箱を取ると、蓋を開けてこちらへ差し出した。先ほどモニターで示したものと寸分違わぬといえそうなソムリエナイフに絶句する。今さら、「本当は(P.97上左画像)のようなものを探している。」など、云えなくなってしまった。「これもブルガリアを旅した記念と思えば良いか. . . .」と何となく納得する。120Lv(6,590円)だった。

しかし帰国後調べてみればレーニョアート(Legnoart)はイタリアのメーカーなのだ。そして通信販売ならば安いところは5千円強だった。なんたることか！

左：アコーディオンとヴァイオリンで民謡を奏でる老人。右：前に投げ銭用の帽子を置きバグパイプを演奏。

レーニョアートのソムリエナイフ。

## １１．バチコヴォ(Бачково)

### 移動方法

明けて11月19日、朝食を摂りながらディミタールに移動方法をあれこれ相談する。この日向かうバチコヴォへは、距離的に30キロ弱なのでタクシー利用をほぼ決定していた。問題はバチコヴォからコプリフシティツァまでだ。プロヴディフからバスを利用するとなれば、バスステーションは市の北部で未知の場所だし、午後4時半発の一便しかない。カルロヴォまでは頻繁にバスがあるものの、そこから先の連絡は不明だ。タクシーは距離が120キロを越えるのでかなり高くつく。

鉄道利用はコプリフシティツァ駅から村まで8キロもあり、連絡バスは不定らしい。英ガイドには、